

子ども食堂における読書支援のあり方

寺島 香澄

現在、子ども食堂という取り組みが日本全国で広がっている。これは2012年に日本で開始された取り組みで、一般的に子どもが一人でも行ける無料または定額の食堂とされている。地域の子どもの貧困や孤食に気づいた民間の人々によって始まったが、現在では貧困層の子どもに対する食事支援にとどまらず、地域の子どもの、ひいては地域全体の居場所としての性格も持ち合わせるようになった。子ども食堂は他者との交流から自分を確認できる「社会的居場所」、他者から独立して自分を取り戻せる「個人的居場所」の両側面を持つ居場所であると考えられる。

子ども食堂を社会的／個人的の両側面を持つ居場所ととらえた場合、そこで行う活動として読書に関わる活動が考えられる。読書は一人でも複数人でも行える活動であり、このような特性と子ども食堂の居場所としての性質は、親和性が高いのではないかと考えられる。

そこで本研究では、参加者の読書を促したり、読書ができる環境づくりを行ったりする活動を広く「読書支援」として捉え、子ども食堂において行われている読書支援について検討する。そのために、長期的かつ継続的に読書支援を行っている、すなわち読書支援が成功していると考えられる2つの食堂においてフィールドワークとインタビューを行った。

その結果、あだち子ども食堂においては、毎回必ずボランティアによる読み聞かせが行われており、読み聞かせは参加者たちに受け入れられて習慣として根付いていた。実際に、絵探しの絵本を読んでいる際には子どもが指をさして反応を返すなど、読み聞かせを通じてコミュニケーションが生まれていた。一方、鳥取市における図書提供事業では市立図書館と市の人権福祉センターが連携することで本を読むことが出来る「環境づくり」が行われていた。すなわち図書館員によって選書された本が毎月入れ替えで届けられており、子ども食堂の参加者はそれを自由に読むことが出来るようになっていた。

調査の結果をもとに、両事例の読書支援を子ども食堂の居場所としての性質と照らし合わせて考察した。あだち子ども食堂は開催時間が短く「個人的居場所」としての側面が強い食堂である。その中で読み聞かせが行われており、「社会的居場所」を生み出す役割を果たしていた。一方、鳥取市内の子ども食堂は交流が重視されており「社会的居場所」としての側面が強い。ここでは自由に読むことのできる本が子ども食堂における「個人的居場所」を担保していた。2つの事例から、読書支援は子ども食堂の居場所としての性質を上手く補うことが出来る活動であることが分かった。

今後は、今回の調査で明らかになった読書支援の特性とそれぞれの食堂の状況を照らし合わせ、個々の食堂にあった方法で読書支援が行われていくことが望ましいと考えられる。

(指導教員 松林麻実子)